1964年、「あすなろ学園」の開設はどのように報じられたのか

「保護者と職員の会」の保存資料から

立命館大学先端総合学術研究科

植木 是

要旨：

日本初の自閉症児施設「あすなろ学園」（三重県立高茶屋病院内）の開設は1964年1月15日である。当時はどのように新聞紙で報じられていたのか、現在は関係者間でも知られていない。そこで本稿では新たに発見された「保護者と職員の会」の保存資料を用いて、同資料に収録された1964年の3つの記事を掲載し、そこでどのようにあすなろ学園と自閉症が語られているのかを概観・整理した。また新聞社の検索ではアクセスしづらい記事を補足するものとして「あすなろリスト」を整理し、1960年代に焦点をあてて分析した。結果、1967～1968年の「自閉症児の親の会」全国組織化の話は複数取り上げられているが、それに先だって設立されていた専門施設、1964年あすなろ学園の開設の頃に関する記事、つまり新聞社の検索ではアクセスしづらい記事があったことが明らかとなった。このようにして、a. 1964年専門施設の開設があり、b. そこを拠点として親たちの活動が拡がり、c. 地元・各地で親の会が結成されその会の活動が拡がり、d. 1967～1968年親の会全国組織の大会の開催が新聞報道などに取り上げられ、e. これらを経て1960年代末頃より、「自閉症」ということば／概念が世に広がっていった、ということも考えられる。

キーワード：

自閉症児施設、あすなろ学園（三重県立高茶屋病院内）、自閉症児の親の会、新聞報道、「保護者と職員の会」保存資料

1. はじめに

日本初の自閉症児施設「あすなろ学園」（三重県立高茶屋病院内）の開設は1964年1月15日のことである。1964年開設の頃のあすなろ学園および自閉症とその周辺に関して、当時はどのように報じられていたのだろうか。本稿では、新たに発見された親の会の資料★01に収録されている1964年の3つの記事を掲載し、そこでどのようにあすなろ学園と自閉症が語られているのかを概観・整理する。

1.2. 資料・方法

先にみた資料に含まれる1960年代の新聞切り抜きを表1に整理した★02。なお表1にある記事の全文(No1~20)は、「arsvi.com」ホームページ(以下、HP)の「あすなろ学園」に収録した★03。本稿ではこの資料(以下、本稿では「資料集」という)を用いる。

表1. あすなろ学園関係施設親の会由縁の倉庫にあった新聞切り抜き集——1960年代

No	年月日	新聞社名、記事名	A	B	その他対象の疾病・障害等の記載、他特徴
1	1964/5/14	毎日「よみがえった情緒障害児 あすなろ学園の四ヶ月」	○	○	学校恐怖症、情緒障害
2	1964/6/19	朝日「精神障害児の病院 津市の「あすなろ学園」を見る」	○	○	学校恐怖症、軽い分裂病
3	1964/10/19	毎日「学校恐怖症で注目の発表 学力優等児に多い 津の医師ら二人 必要な環境の調整」	○	—	学校恐怖症、精神障害児施設
4	1966/11/2	京都「はげまし人生 自閉症 問題はどこに」	○	○	重症情緒障害児治療施設、精薄児施設
5	1967/2/27	毎日「自閉症 ある日突然に、子供を襲う悲しみ 黙って片すみに 何とかして親が立ち上がる」	○	○	「自閉症児親の会」結成特集
6	1967/4/6	毎日「新しい子どもの病気 自閉症」	○	○	
7	1968/1/15	読売「身障児慈善ショー 自閉症を超えた少女も演奏」	—	○	
8	1968/2/9	毎日「自閉症の子 日が当たります 病舎で治療や教育 都が予算に」	○	○	
9	1968/2/15	読売「自閉症 治療と教育の場がほしい 特殊学級も締め出し 病院や施設、相談所を転々」	○	○	
10	1968/4/8	読売「自閉症を学校で治療 「ハダ」の接触で効果 都情研の研究報告」	○	○	
11	1968/5/18	朝日「自閉症児に光を 「親の会」手つなぐ 先生らも学級設置の運動」	○	○	
12	1968/5/19	東京「常陸宮ご夫妻をお迎えして『自閉症児親の会』初の全国大会」	—	○	「自閉症児親の会」全国大会特集
13	1968/5/20	日本経済「「早く治療と施設を」自閉症児親の会 初の全国大会開く」	—	○	「自閉症児親の会」全国大会特集
14	1968/5/20	読売「自閉症児手をつなぐ「親の会」/「もっと治療施設を」/初の全国大会で訴える」	—	○	「自閉症児親の会」全国大会特集
15	1968/5/20	毎日「自閉症児の親が全国大会/“勉強の場と治療施設がほしい”」	—	○	「自閉症児親の会」全国大会特集
16	1968/5/20	サンケイ「治療や教育を早く/初の全国大会 自閉症児の親たち」	—	○	「自閉症児親の会」全国大会特集
17	1968/6/2	東京「自閉症児対策一歩踏み出す 都 治療施設を作る 小学校受け入れも検討」	—	○	
18	1968/11/18	中日「教育の四季 情緒障害」	○	○	神経症、分裂症
19	1968/不明	日本経済「自閉症児に学校教育 実験学級で成果/大阪 症状に応じて学習」	—	○	一見精神薄弱と似た症状をもつ自閉症
20	1969/7/15	聖教「貝になった少年口開く/サヨウナラ!「自閉症」/元気に通学 喜びの両親」	—	○	

(* あすなろ学園関係施設の親の会由縁の保存資料を参照に、筆者作成(2020))

(*A→「あすなろとその関係者の記載」、B→「「自閉」の記載」を示す。また、「○」は記載あり、「—」は記載なしを示す)

ところで、新聞社の記事データベースを検索すればよいではないかと思われるかもしれない。しかし、そうでもない。そのことについて(より詳しくは別途報告するが)、1.3~1.4で述べる。

1.3. なぜウェブ検索だけに頼らず、その資料集を使うのか

以下にその理由/必要性について説明する。

(1)「自閉症」という言葉自体が定着していなかった時期のことを知ろうとしている

新聞社の記事データベースを検索すると記事によっては「自閉(症)」という言葉がない場合がありうるし、実際にある。また「自閉」や「自閉的」といった言葉自体は様々に使われる。よって、キーワードとして「自閉症」を記事に付してそのキーワードが付される記事(だけ)が出てくる場合がある。またそれは同時に、キーワードが付されず出てこない可能性もあるというこ

とである。

(2) 新聞社の記事データベースに単純な入力ミスがあって検出されない場合もある

(1) を踏まえるとウェブ検索、とりわけ新聞社の記事データベースに頼ればよいということだけにはならない。そこで、あすなろ学園というその施設を開設した側の認識としては(当時の報道では、「精神障害児のための施設」や「情緒障害児のための施設」と紹介されていたが、当時、どこも行き場のなかった)自閉症者(児)のための施設とされ、また後にもそのように位置づけられたあすなろ学園(についての報道)を見ていくというのは一つの有効な手立てとなる。

資料に報道のすべてが網羅されているかどうかは、もちろんわからない。しかし、当時取材を受けそれが記事になった場合には、それらをすべて保存しようとしたはずであり、もちろんすべてでないとしてもかなりの割合がここにあると推定することは不合理ではないはずだ。

上にみたことを踏まえて、筆者は新聞社の記事データベースを含めてウェブ検索を行っており、それも活用している。ただ繰り返しになるが、先にも紹介したように単なる新聞社による誤入力によって出てこない記事も実際にあった(これについては、1.4で述べる)。

以上が、その理由/必要性である。

1.4. ウェブ検索について――現在の新聞社の記事データベースではうまくいかないことがある、その一例

朝日、毎日、読売の大手3紙は検索システムを整備してきている★04。詳しくは別途報告するが、たとえば朝日新聞の場合、1960年代の「自閉」および「自閉症」に関する検索結果は15件(2022年8月23日現在)★05であった。一方、朝日新聞で「あすなろ学園の開設」について報じた記事は1件で、1964年10月19日朝日新聞「精神障害児の病院 津市の「あすなろ学園」を見る」である。しかし、この記事は上にみた15件の検索結果には含まれていない。また「自閉」および「自閉症」、そして「あすなろ学園」でもヒットせず、「あすなろ」でようやくヒットする。その理由は、「あすなろう学園」(*下線部筆者)と入力されているためである(2022年8月23日現在)。つまりこの場合、朝日新聞の検索システムの明らかな誤作業によるものである。

上にみたようなことから、いわゆる「あすなろ学園の開設について報じた記事」には、検索システムの通常の活用法だけではなかなかアクセスが困難な実情にあることがわかる。

1.5. 資料を入手した経緯

さて、ここでは資料集とそれらを入手した経緯について、以下に説明する。

・経緯 1

筆者は、自閉症施設の黎明期を知るための聴き取りと資料収集を、2004年より三重県の自閉症施設とその関係者、親の会とその周辺から進めてきた。当時は、筆者の勤めてきた「おおすぎれんげの里」の先輩施設であるあすなろ学園、「あさけ学園」に問い合わせてもよくわからない状態であった。また資料は既に散逸しており、いずれも資料室あるいは書庫とは名ばかりのもので倉庫のような状態にあり、また引継ぎも十分にできていない状況にあった。そのなかで、「三重県自閉症協会」の活動を通じて貴重な資料が発掘され、世に出る機会に恵まれた。2020年6月29日「三重県立子ども心身発達医療センター」(*2017年よりあすなろ学園が再編統合化された後進施設)での出来事であった。当時三重県自閉症協会役員・前会長、おおすぎれんげの里評議員・中野喜美による報告(三重県自閉症協会 [2020])によると、以下のようである。

～あすなろ学園の歴史～

令和2年6月29日に「三重県立子ども心身発達医療センター」の高橋課長様からお誘いをいただき、「三重県立子ども心身発達医療センター」の前身である「あすなろ学園」が歩んできた資料や、その親の会の活動の記録を拝見することができました。

資料を並べていただいた部屋に入ると、昭和40年代前半のアルバムから始まり年代順にきれいに並べられていました。そして、年表までプリントしていただいてあり時代の流れがとてもよくわかります。

懐かしいとは言えないくらい私たちが知らない時代の資料は、色あせて用紙の大きさや紙質も様々で、中には、こよりで綴じてあるものもありました。

「三重県自閉症協会」の前身である、「自閉症児を守る会」が発足するもっと前から「あすなろ学園の親の会」(入院している子どもの保護者会)の活動は始まっていました。その親の会のお父さんお母さんたちが、手書きの要望書・嘆願書で行政を動かしてきてくださった軌跡がありました。感動でした!

この頃の医師や職員さんたちからも、大きな後押しがあったようです。

このような先輩方の力強い活動があったからこそ、今の子どもたちの環境があるのだと感謝です!

そして、資料の外側の机の上には、緑色の表紙の親の会の文集もありました。バラりとめくったページには、母親としてこどもを慈しむあたたかい言葉が綴られていました。先輩方のこどもを思うが故の資料の言葉に触れ、文集の中の母として同じ気持ちの言葉に触れ、胸が熱くなりました。

貴重な資料を残していただき、ありがとうございます。この度は拝見させていただきました、ありがとうございます。(三重県自閉症協会 [2020])

上にみた「高橋課長」は地域連携室ソーシャルワーカー(社会福祉士)・高橋悟(現・部長、これをきっかけに2022年度より三重県自閉症協会顧問となる)のことで、西田寿美園長(児童

精神科医、現・おおすぎれんげの里診療所所長)のもと最後のあすなろ学園史『あすなろの30年』(あすなろ学園 [2016])の編集作業の中心的役割を担った重要人物である。あすなろ学園転籍の前には「城山れんげの里」の前身の敷地建物にもあたる「県立樹心寮・県立センターはばたき」に在籍し、その当時「三重県社会福祉士会」の立ち上げ時には柳誠四郎(おおすぎれんげの里初代施設長・常務理事、現・理事長)らと活動してきた「ソーシャルワーカーの同志」的つながりでもある。

筆者は2016年あすなろ学園地域連携室を訪れた。その際、「2020年におおすぎれんげの里が設立20周年を迎えるため、それに向けた記念事業にも向けて、是非、施設設立の経緯がわかるもの、例えば親の会とか施設職員の活動に関する資料・情報について、何か収集する手がかりはないか」と申し出ていた。その背景には、施設立ち上げに人生の大半をかけてきた施設づくり運動の担い手となった親たちの高齢化があり、何とかこの歴史を紡いでいくことが大切だと感じていた筆者、そしてその大切さを教えてくれる、後述する宮本隆彦ら施設づくり運動親の会発起人会主要メンバーのわが子らへの尊い想いがあった。その想いを伝えていくなかで、その過程で種々の困難がありながらもご協力をいただいた結果、前述の資料群(三重県自閉症協会 [2020])が発掘されたのである。

高橋(2020a, 2020b)の私信によると次のようである。

ある時、中央倉庫で探し物をしていると、たくさんの資料の中から、昭和39年前後からの古い資料が見つかりました。あすなろ学園時代の保護者会の活動や当時の新聞の切り抜きなどです(高橋 [2020a]、下線部筆者)。

あるきっかけがあり、中央倉庫に眠るかつてあった保護者の活動に関する資料を見つけることになった(高橋 [2020b]、下線部筆者)。

・経緯2

先に述べたとおり、2016年当時は資料が散逸した状態にあった。しかしながら、高橋課長より「おそらく、2017年再編新築される三重県子ども心身発達医療センターへの移転作業の際には、色々昔のものも出てくると思われる。その時には捨てないように保管していきたい」と協力を得られた。また筆者は同時期に親の会と対話交流し、第二、第三世代にあたる三重県自閉症協会の当時の会長・中野と事務局長・横山美香のほか、第一世代にあたる元あすなろ学園親の会で現あさけ学園親の会、元日本自閉症協会副会長で当時「檜の里(あさけ学園)」理事、当時「岐阜県自閉症協会」会長・水野佐知子にも取材・協力依頼していた。

それらを受けて水野は「2019年岐阜県自閉症協会設立50周年に向けて、自閉症施設の歴史に関する資料・情報収集に向けて何か手がかりはないか」と筆者と連携の後に高橋へ協力依頼をした経緯があった。これらの縁——あすなろ、あさけ、れんげに連なる親の会と施設職員の歴史——が繋がった結果として、この度の共有・公開が実現したものである。

・経緯3

2020年10月2日にあすなろ学園(2017年再編統合化に伴い閉園)後身施設の三重県子ども心身発達医療センターにおいて、①〈個人情報取り扱いには十分に留意したうえで〉、②〈自閉症児者のための更なる支援の発展のために共有〉し、また③〈今後も収集・保管、そして分析していくこと〉を、同センター医療連携室・高橋悟課長(当時)とおおすぎ評議員・おおすぎ連合保護者会会長・おおすぎ設立発起人会役員の宮本隆彦は合意した。またその橋渡し役として筆者は同席・合意し、また、あさけ学園親の会役員で岐阜県自閉症協会会長(当時、現在は岐阜市支部/ブロック長)・水野佐知子にも筆者は橋渡し役として後日その経緯を伝え合意を得たものである。その後の流れで、親の会と施設設立発起人会の立場として宮本側からの働きかけもあり、いわゆる自閉症施設関係者、とりわけおおすぎれんげの里理事長の柳誠四郎、れんげの里前納欣人施設長、三重県自閉症協会及び関係する親の会、あさけ学園近藤裕彦施設長、にて共有・保管がなされた。なお新聞の切り抜きは、他の資料とともにファイル内に保存されていたが、他と同様に劣化が著しいため高橋によって順次施設事務室によりスキャンされ保存・共有された。

2. 資料集にある記事

以下、記事1~3全文(記事番号は掲載日順)を示す。すべて1964年あすなろ学園開設当初の取り組みを伝えるものである。ここでは、日本では従来の施設、病院では行き場のなかった自閉症児に対応し得る唯一の施設であった当時の園の様子を伝えている、そこでの実践の捉えられ方(それは施設側の説明の仕方であったかもしれないが)がわかる。

(1) 記事1全文

以下に全文を示す。なお、下線部は筆者が付したものである。

・1964年5月14日毎日新聞「よみがえった情緒障害児 あすなろ学園の四ヶ月」

よみがえった情緒障害児

生活すべてにメス もう2人が明るく退園

“さよなら”とお別れの手をふるママにも悲しみやさみしさの表情一つ現わさぬ子、月曜日の朝になると、急に頭痛や腹痛を訴えて学校へ行きながらぬ子——この子ら(情緒障害児)が“あすなろ学園”=津市高茶屋=にはいって四ヶ月が過ぎた。いまでは面会を終わって帰る母親にすがって泣き“学校へ行くんだ”とダダをこねて保母さんを困らせるまでになった。以下は精神医学に新しく登場した“情緒障害児の治療のレポート”

あすなるの四ヶ月(四角カッコで囲い)

“あすなる学園”は、津市高茶屋小森町の高台にある県立高茶屋病院の第十四病舎にある。広大な敷地は、静かで、明るい。学園のグラウンドには、遊具が並び、幼稚園のよう。この一月、同園が全国にさきがけてつくったもので、四才から十五才までのこどもが生活している。

自分の中に閉じこもって、家族、学校、友だちの集団の中には、全然はいれない幼児期自閉症、月曜日になると腹が痛くなる(小児科の診断を受けても、なんら身体的な症状はない。土曜日の午後からはしゃぎ、日曜日は朝から飛び回っている) 学校恐怖症の子らである。A子ちゃん(六つ)は、アルファベットを全部読み。知能指数は小学二、三年程度。でも母親に連れ添われ入院した当時は“すぐ迎えにくるからね。さよなら”と家へ帰るお母さんと顔を合わせても、さみしがるでなし、まったくの無表情。A子ちゃんにとってママは見も知らぬ他人といった表情。同院は「自分の意思、性格を十分話せない、この子たちの診断にあたっては、ただ母親が語る“わが子”を参考にするだけ。その母親の声も、どこまで客観性もっているか疑問だった。いたいけなこどものすべてを知って、一日も早く健全な精神にかえらせよう」と“あすなる学園”が建てられた。

母親にも精神療法

十亀(そがめ)史郎医師(三二)ら医師九人、看護婦など十八人、計二十七人が、チーム・ワークをとり、患児の全生活にタッチして治療の対象をつかみ、治療を施すのがねらい。学園は児童部と思春期部(中学生)に分けられている。児童室には、自動車、電話のオモチャが並び、大型の積み木も幾組もある。療法スケジュールに従い、朝の体操から一日がはじまる。オルガン伴奏で遊戯を楽しみ、ピカソばりの絵を描いている。

回復後は、すぐ母校へ帰れるよう算数、国語の基礎学習は欠かさない。休憩時間には運動場で遊戯、また絵画で心理療法を施すのをはじめ、すべてが、生活、環境のなかで健康な精神を取り戻していく療法である。

喜々と学び、遊ぶその姿は、正常児と変わらないが、保母、看護婦の目は一人々々のちょっとした動作やクセにも気を配っている。治療の資料をとるのだ。家庭では“はれもの”のように大事に扱われてきた子たちだが、ホウキを持って掃除に加わるし、給食の配ゼンが楽しそうだ。

A子ちゃんは、乳児時代、理性が強くて、愛情の薄い母親に育てられ、母親の性格そのままを受けついで。人間的な暖かみを知らないまま入学前になっても、喜びや悲しみの表情は、顔に現れぬので、主治医と相談して入園した。患児の治療とともに、母親の精神療法も並行して行なわれている。

担当のケース・ワーカー岡本聡美(二三)は「週一回、お母さんたちと会い、家庭のこと、お母さんに改めて“自分”と“家庭”を見直してもらっている。最近のお母さんたちの育児

法は、本屋さんに並んでいる“育児読本”そのままだ。子どもは左キキなどそれぞれの特徴をもっている。画一的な育児でなく、子どもの特徴に合わせた育児や指導をしていくべきではないでしょうか…」と語る。

この四ヶ月で、すでに二人が退院して母校に帰っていった。いつも、保母さんたちに、だっこされてきた A 子ちゃんは、ママがケース・ワーカーに面接にくると、いつときもママから離れない。母も子も人間としての情緒を次第に取り戻している時期だ、と医師たちはいう。

(2) 記事2全文

以下に全文を示す。なお、下線部は筆者が付したものである。

・1964年6月19日朝日新聞「精神障害児の病院 津市の「あすなろ学園」を見る」

みんなの健康

三重県の津駅から南や約六キロ、旧参宮道を横切った城山地区の丘陵地帯に県立高茶屋病院(精神病院)がある。ここは旧海軍工廠(こうしょう)の病院跡で七万三千平方メートルの広大な病院敷地は病める魂をいやす包容力を感じさせる。

昭和二十五年に設立されたこの病院の両隣には精神薄弱者更生補導施設、養護学校、身体障害児を収容する草の実学園(いずれも県立)などがあり、この高台一帯はさながら三重県の誇る“精神身体障害者センター”だ。

こういう環境の中にもう一つ、今年の一月から『あすなろ学園』が開設された。高茶屋病院内付属の児童病棟(病棟)だが、情緒障害や精神障害のあるこどもたちの病院であり、幼稚園であり、学校であり、生活の場であるところに、その特色があって、全国でも、珍しい取り組みとして関係者の注目を集めている。

明るい患者たち

初夏の明るい日ざしが降り注ぐ六月初旬の昼さがり――広い学園運動場の一角にある“ジャングルジム”で六、七人の子どもたちがここで生活を共にしており、徳島、広島、岐阜、名古屋など、県外から来ている子もまじっている。四歳の K 子ちゃん、六歳の A 君は共に自閉症。この病気は、一、二歳ごろから急に母親や周囲の者に対して無関心になり、ひとりごとをいったり、ひとり遊び、ひとり笑いをするようになる。そして食事や排便など、生理的欲求以外は何も要求せず、心理的には全く社会と隔絶した文字通り“自閉”の世界の住人となる。半面、自分の好きなことにかけては天才的な才能を示す場合が少なくない。K 子ちゃんは一度聞いたメロディーを、あざやかにオルガンに再現してゆく。入学前の A 君は患児に異常な関心を持ち、“独学”で小学校三―四年生で習う漢字を自由に読み書きできるという。

強迫症状もとれて軽い分裂病だという L 子ちゃんは小学一年生。一月に入園したころは寝室のドアを開けたり閉めたりする強迫症状が強く、話のあとには必ず「ホント」とつけるのが口ぐせ。家に手紙を書くときも「おかあさん、はやくあいにきてねホント。おみやげもってきてねホント。――L子よりホント」といった調子。しかし、五カ月の療養生活を送った現在、言葉の表現がスムーズになって強迫症状も、うす皮をはぐようにとれ、対人関係にも積極性が見えてきた。

学校恐怖症で、自宅ではガンとして登校を拒否していた E 子さん(中学二年生)も最近メキメキよくなり、いまでは毎朝六時半の汽車に乗って、ここから元気に通学している。

完備した治療施設

こうして、あすなろ学園では、徐々ではあるが、治療の成果をあげつつある。八百平方メートルあまりの近代施設には「児童用」「思春期用」に分けた室をはじめ、遊戯治療用のオモチャがいっぱいあって砂場まで設けられているプレールーム、寝室、浴室、臨床チーム室、観察室などが完備され、医師が交代で数人、ケースワーカー一、保母八、看護婦二、看護助手一人が治療や生活指導にあっている。

担当医の十亀(そがめ)史郎医師は「これらのこどもたちは、いろいろ病名がついているが、普通の病気のように、一つの症状に対して一つの原因があるのではない。そのほとんどが、家庭環境、発育途上の中に持続的な問題があるのだから、それを取除き、適切な環境と愛情を与えることが第一」と、治療方針を語る。そのためには鉄格子やのぞき窓のある“看視”された“収容施設”では効果は期待できないのだ。

世間の冷たい目

それにしても、あすなろ学園に対する世間の目はまだ冷たく、理解が足りない。精神障害児への偏見がある。だから、入院させて病気をなおしてやりたい親ごころにも、ついブレーキがかかる。学園で正規の学校教育を受けられるようにもしたいが派遣教員はいまのところ実現しそうにはないという。

しかし「のりかけた船。当分は赤字の連続だが、気ながに、できる限りのことをやってみますよ」――何ごとも患者優先主義の井上正吾高茶屋病院長は決意のほどを見せていた。

ダ足かも知れないが、ここを見て「小児病棟」という言葉を思い出させるものが一つあった。それはカギである。開放的な“学園”なのにドアが、やたらと多く、出入りのたびに保母さんがガチャガチャ、カギで開け閉めする。あるいは、病院としては当然の処置の一つかもしれぬ。

精神障害児は、早く適切な治療さえすれば、なおせるものが多いのだ。世間の偏見が、彼らの治療を、おおきくはばんでいることを考えると、こうした病院の中かけられるカギを気にするまえに、社会の方が、これらのこどもたちに対してかけている“心のカギ”を早くあけるべきではないかと感じさせられた。

写真説明：静かな環境に包み込まれた津市の「あすなろ学園」

中見出し：適切な環境と愛情

“閉ざされた心”をひらく

写真説明：左 あすなろ学園

十亀 史郎医師 中央 ケースワーカー

岡本 聡美さん 右 高茶屋病院院長

井上 正吾さん

(3) 記事3全文

以下に全文を示す。なお、下線部は筆者が付したものである。

・1964年10月19日毎日新聞「学校恐怖症で注目の発表 学力優等児に多い 津の医師ら二人 必要な環境の調整」

写真上 十亀 医師

写真下 田中 医師

最近、学校へ行くのをこわがるこどもがふえており、こうしたこどもをもつ、父母を心配させているが、津市高茶屋小森町の県立高茶屋病院の医師十亀（そがめ）史郎（三二）と同田中雅文（三一）の両氏がこのほど福岡市の九州大学で開かれた「児童精神医学会」で“学校恐怖症児の家族関係”と“学校恐怖症児の入院治療”という二つの研究発表を行ない注目されている。

“学校恐怖症”にかかっているのは比較的知能の高い学力優等の児童に多く、本人は、学校へ行きたい気持ちもちながら“給食がまずい”“先生によくあてられる”“きれいな音楽の時間に歌わされる”などちいさなことから学校へ行かなくなる。しかし、この病気は、精薄児や非行少年が学校をきらったり、ズル休みをするのとはっきり区別される。

“学校恐怖症”のこどもはきちょうめんであると同時にわがままな性格のこどもが多く、夕方から夜にかけてはきげんがよくあすの時間割のノートや教科書をきちんとカバンにつめて準備して寝るが、当日の朝になるとむずかって起きなかったり、頭痛などを訴え、学校に行きたがらないという。

この入院治療施設として県立高茶屋病院に「あすなろ学園」＝精神障害児童施設＝というのが設けられている。全国では、はじめての施設で、十亀、田中両医師が担当“学校恐怖症”治療と研究に取り組んでいる。……（ママ）

この病気は放置しておく、自分の室にとじこもって読書や模型の組み立てなどにふけて家族との交渉すらなくなり、精神的な症状を呈するようになる。一方、学校恐怖症の子どもをもつ親は絶望的な気持ちをもつようになる。専門医と家族が会って、一しょに考え、“環

境調整”が大切であることを結論している。

どうしても学校に行かない子供が入院することによって学校に行くようになった例としては①環境に原因があり家族から分離した②病院では、他の子供たちといやでも集団生活をせねばならず、グループ生活になれてくるなどの点をあげており、両氏は「入院治療は環境が“権威”と“保護”の両面を持っているため心理的に安定感を与えるためか、家族療法より効果は大きい」と語っている。

また両氏は津市の小中学生約一万五千五百人について調べたところ明らかに“学校恐怖症”のこどもが三十人あった。これは約五百人に一人の割合でこの病気のこどもがいることを示している。

それでは上にみたことからわかることを(より詳しくは別途報告するが)2.1、2.2で、短く列記する。

2.1. 記事の特徴1——自閉症という語がある記事、ない記事、他

その特徴は以下A～Dのように整理できる。

- A. すくなくとも記事の(メインの)題に「自閉症」が使われている記事はない。
- B. 記事1、2については「(幼児期)自閉症」が使われているが、記事3については「自閉症」が使われていない。
- C. すべてに共通して「学校恐怖症」★06という語が使われている。
- D. この時点ではまだ「自閉症児施設」、「自閉症施設」という記載は確認できない。

2.2. 記事の特徴2——その人たちについて、どのような捉えられ方がなされているか

その特徴は以下a～fのように整理できる。

a. 治療(精神科/精神障害)の対象として捉えられようとしている

例として以下の記述を挙げる。なお下線部は筆者が付した。

・「同院は「自分の意思、性格を十分話せない、この子たちの診断にあたっては、ただ母親が語る“わが子”を参考にするだけ。その母親の声も、どこまで客観性をもっているか疑問だった。いたいけなこどものすべてを知って、一日も早く健全な精神にかえらせよう」と“あすなる学園”が建てられた」【記事1】

・「医師九人、看護婦など十八人、計二十七人が、チーム・ワークをとり、患児の全生活にタッチして治療の対象をつかみ、治療を施すのがねらい」【記事1】

・「精神障害児は、早く適切な治療さえすれば、なおせるものが多いのだ。世間の偏見が、彼らの治療を、おおきくはばんでいる」【記事2】

・「“学校恐怖症児の入院治療”」【記事3】

b. 治療のほか教育・生活面でのはたらきかけが必要とされている

例として以下の記述を挙げる。なお下線部は筆者が付した。

・「「…」患児の全生活にタッチして治療の対象をつかみ、治療を施すのがねらい」(再掲)
【記事1】

・「情緒障害や精神障害のあるこどもたちの病院であり、幼稚園であり、学校であり、生活の場である」【記事2】

・「初夏の明るい日ざしが降り注ぐ六月初旬の昼さがり――広い学園運動場の一角にある“ジャングルジム”で六、七人の子どもたちがここで生活を共にしており」【記事2】

・「学園で正規の学校教育を受けられるようにもしたいが派遣教員はいまのところ実現しそうにはないという」【記事2】

・「「…」病院では、他の子供たちといやでも集団生活をせねばならず、グループ生活になれてくる」【記事3】

医師による治療のほか、心理面からの箱庭療法や遊戯療法などのはたらきかけ、福祉面からのケースワーク・保育・家庭支援、教育面での幼児教育・保育支援的なはたらきかけを模索していたことがわかる。

c. 全国的に〈さきがけ／珍しい取り組み／はじめて〉の対象とされている

例として以下の記述を挙げる。なお下線部は筆者が付した。

・「同園が全国にさきがけてつくったもので、四才から十五才までのこどもが生活している」
【記事1】

・「情緒障害や精神障害のあるこどもたちの病院であり、幼稚園であり、学校であり、生活の場であるところに、その特色があって、全国でも、珍しい取り組みとして関係者の注目を集めている」【記事2】

・「入院治療施設として県立高茶屋病院に「あすなろ学園」＝精神障害児童施設＝というのが設けられている。全国では、はじめての施設」【記事3】

治療を前提としながら、生活(福祉)を捉えようとしていること、そして就学猶予・就学免除にあったこのような子どもたちに対して、必要な支援(教育・心理・福祉での支援)を模索し始めていることがわかる。

d. 入所(院)してからよくなった、といわれている

例として以下の記述を挙げる。なお下線部は筆者が付した。

- ・「生活すべてにメス もう2人が明るく退園」【記事1】
- ・「[...] この子ら(情緒障害児)が“あすなろ学園”=津市高茶屋=にはいって四ヶ月が過ぎた。いまでは面会を終わって帰る母親にすがって泣き“学校へ行くんだ”とダダをこねて保母さんを困らせるまでになった」【記事1】
- ・「入学前のA君は患児に異常な関心を持ち、“独学”で小学校三・四年生で習う漢字を自由に読み書きできるという」【記事2】
- ・「[...] 五カ月の療養生活を送った現在、言葉の表現がスムーズになって強迫症状も、うす皮をはぐようにとれ、対人関係にも積極性が見えてきた」【記事2】
- ・「[...] 自宅ではガンとして登校を拒否していたE子さん(中学二年生)も最近メキメキよくなり、いまでは毎朝六時半の汽車に乗って、ここから元気に通学している」【記事2】
- ・「どうしても学校に行かない子供が入院することによって学校に行くようになった [...]」【記事3】

e. 本人のみではなく家族療法・家庭支援を並行実施する

例として以下の記述を挙げる。なお下線部は筆者が付した。

- ・「患児の治療とともに、母親の精神療法も並行して行なわれている」【記事1】
- ・「担当のケース・ワーカー [...] は「週一回、お母さんたちと会い、家庭のこと、お母さんに改めて“自分”と“家庭”を見直してもらっている [...]」【記事1】
- ・「家に手紙を書くときも「おかあさん、はやくあいきてねホント。おみやげもってきてねホント。――L子よりホント」といった調子」【記事2】
- ・「専門医と家族が会って、一しよに考え、“環境調整”が大切である [...]」【記事3】
- ・「[...] 「入院治療は環境が“権威”と“保護”の両面を持っているため心理的に安定感を与えるためか、家族療法より効果は大きい」と語っている」【記事3】

f. 小括：終身収容型の施設を目指していない

上にみたことから、あすなろ学園は開設当初からなんとかして「なおす」ことに力点を置き、入院治療施設ではあるものの、終身収容型の施設を目指していない。そうした取り組みのなかでは、「通える子は病院から地域の学校へ通う」、「通えない子も制度化されていないが院内教育・学習を支援する」、「退園して地元の家庭、保育・幼稚園、学校に帰る」ということ、そして施設開設から4~5ヵ月間での(医学的管理のみだけではなく、教育・生活面からみた総合的なはた

らきかけをめざした)治療の効果を紹介している。

3. まとめ

本稿では、あすなろ学園開設の時期、どのように報じられていたのか、新聞社の検索結果ではなかなかアクセスしづらい記事を補足するものとして、新たに発見されたあすなろ学園親の会の保存資料にある新聞切り抜きから「あすなろリスト」を整理し、1960年代に焦点をあててみてきた。そのなかでは1967～1968年の「自閉症児の親の会」全国組織化の話は複数取り上げられているが、それに先だって設立されていた専門施設、1964年あすなろ学園の開設の頃に関する記事(上に見たようなアクセスしづらい記事)があったことが明らかとなった。

自閉症とその周辺の疾病・障害をもつ児童の処遇問題に関しては、a. 1964年専門施設の開設があり、b. そこを拠点として親たちの活動が拡がり、c. 地元・各地で親の会が結成されその会の活動が拡がり、d. 1967～1968年親の会全国組織の大会の開催が新聞報道などに取り上げられ、e. これらを経て1960年代末頃より、「自閉症」ということば／概念が(親の会からすると正しい認識をもってもらったかどうか、あるいは十分であったかどうかはさておいて、であるが)世に広がっていった、ということも考えられる(なお、1960年代は、まだまだ世間一般では、ほとんど知られていないことば／概念であったと考えられるが、その検討は別の機会とする★07)。

本稿で紹介した3つを含む新聞記事については、今回の資料集にあったものに、データベースで検索して見つけたものを加え、別稿で紹介・分析する。また、①親の会の結成とその周辺を詳細にみていくこと、②朝日、毎日、読売の大手新聞3社の検索システムでの「自閉」および「自閉症」の検索結果(「朝日リスト」、「毎日リスト」、「読売リスト」と「あすなろリスト」を照らしてみていくこと、③「自ら閉ざす」ということばのイメージからくるもの(引きこもり、学校恐怖症、登校拒否、不登校、他神経症等との兼ね合い、および、いわゆる世間一般の「誤解」や「偏見」を助長するようなできごとも含めて)との関連、およびその周辺についての検討について、今後の課題とする。

■註

★01 本稿でみる新聞切り抜きは、「あすなろ学園保護者と職員の間」の活動(1964年8月11日発足)とその流れに連なる、いわゆる「自閉症児者の親の会」(日本自閉症協会とその前身、各地の(支部)活動)と「自閉症施設の親の会」(とそれを支える施設職員／支援者の会)の活動(1980年代～現在)が深くかかわる当時の施設の倉庫に、長らく山積みの段ボール箱のなかに所蔵されていた資料(群)のうちの1つで、新たに発掘されたものである。

★02 ★01を参照。また加えて詳しくは1.5で〈経緯1～3〉を説明する。この資料はあすなろ

学園後身施設の三重県立子ども心身発達医療センター地域連携課課長(当時、現・部長)の高橋悟が2020年に(1.5でみる〈経緯1~3〉を背景にして)段ボールをみつけて以来、新聞切り抜きを随時とりまとめ、スキャンしたものである。その一覧が表1になる。

★03 筆者は2022年10月10日より「あすなろ学園」(とその施設関連)の資料をサイトに掲載している。URLは、つぎのとおりである。<http://www.arsvi.com/o/asunaro.htm> (ホームページ『arsvi.com』)。随時、増補を行なっていく予定である。

★04 〈検索機能の概要〉は、①朝日新聞、②毎日新聞、③読売新聞、の順に、つぎのとおりである。

①朝日新聞、「朝日新聞クロスサーチ」の検索機能の概要(検索可能な範囲)は以下のとおりである。

朝日新聞クロスサーチ外部サイトへのリンクは、朝日新聞、AERA、週刊朝日、アサヒグラフなどの記事を収録するデータベースです。

朝日新聞については、1879年1月の創刊から現在までの大阪・東京本社版の記事のほか、号外、別刷、地域面なども部分的に収録しています。

発行日を指定した検索やキーワード検索、全文検索(1984年8月以降)などが可能です。新聞記事検索のコンテンツは、「朝日新聞1985~」と「朝日新聞縮刷版1879~1999」があり、記事の掲載年によって分かれています(一部重複する期間あり)(国立国会図書館[2022a]、下線部筆者)。

②毎日新聞、「毎索」の検索機能の概要(検索可能な範囲)は以下のとおりである。

毎索は、1872年(明治5)の創刊号から1999年(平成11)までの東京本社版の紙面を収録しています。

また、1987年から現在までの各本社版や地方面の記事検索が可能です。

そのほか、毎日ヨロンサーチ(毎日新聞社が戦後実施してきた世論調査のデータベース)、毎日新聞社史、The Mainichi(英文ニュースサイト「The Mainichi」の記事アーカイブ:2006年8月~)等のデータも収録されています(国立国会図書館[2022b])。

③読売新聞、「ヨミダス歴史館」の検索機能の概要(検索可能な範囲)は以下のとおりである。

ヨミダス歴史館外部サイトへのリンクは、読売新聞とThe Japan News等の記事が検索できる全文データベースです。

読売新聞は、1874年11月の創刊から現在までの東京本社発行の全国版の記事を収録しています。

発行日を指定した検索やキーワード検索、全文検索(1986年9月以降)が可能です。

そのほか、号外や別刷、地域版も部分的に収録しています。

東京本社版については、1874年11月から1989年までは紙面全体の画像を専用ビューアー

で表示することができます。

1990年からは記事本文のテキストのみ、2008年12月以降は記事本文のテキストに加え、記事の切り抜きイメージも表示できます。

東京本社以外の各本社が発行した紙面や地域版の紙面の収録範囲については、「3. 「平成・令和 1986～」について」および「4. 「昭和の地域版 1933～2001」について」で紹介していますので、そちらをご参照ください。

The Japan News には、読売新聞社が発行する英字新聞『The Japan News』の記事などが、1989年9月1日以降収録されています(国立国会図書館 [2022c])。

★05 この検索結果に関する質問について、朝日新聞からの回答(2022年9月27日)は以下のとおりである。

回答：「縮刷版 -1999」のキーワード検索は、全文検索ではなく、見出しの言葉と書誌詳細にあるキーワードから検索いたします。

※1985年以降のデータベースはすべての見出し、記事が文字データとして入っているので全文検索です。

縮刷版については新聞紙面一枚を写した画像データとしてデータベースに入っています。そのため検索できるように後から発行年月日、朝夕刊を書誌として整え、見出しの言葉をすべて文字データとし、さらに人が縮刷版を読み込んでキーワードを付与して作っています。

今回、1960年代の15件については、見出しもしくはキーワードに「自閉症」という言葉がありました。「自閉」のみが一つでもあれば、検索件数に差が出るかと思いますが、すべて「自閉症」でしたので、「自閉」で調べても「自閉症」で調べてもヒット件数は同数となります。

1つの例です。この記事は、見出しには「自閉症」とはありませんがキーワードに「自閉症」とあるので検索結果に出たものです。

1967年(昭和42年)06月08日 東京 夕刊 10頁 1段 記事

見出し「こどもの“現代病”一斉調査 友だちぎらいを解明 特殊教育の手がかりに」

主要キーワード 情緒障害, 小学校, 中学校, 自閉症 文部省

以上となります(*下線部筆者)。

★06 学校恐怖症(school phobia)とは、児童、生徒、学生が何らかの心理的原因で学校や大学に行けなくなる症状のことをいう。現在では、登校拒否・不登校とは異なり、対人恐怖症の一つとされる。1932年にイギリスのI・T・ブロードウィン(Broadwin, I.T.)が怠学(school refusal)という概念を最初に用い、その後1941年にアメリカのA・M・ジョンソン(Johnson, A.M.)が学校恐怖症(school phobia)と命名し、その症状を①心氣的時期、②登校時のパニック時期、

③自閉期の三期、に分類した。学校恐怖症は、黎明期の日本の児童精神医学の現場・学界では、精神科児童病棟における専門的な対処とその支援のあり方をめぐって、自閉症と並んで、注目的であった。

登校拒否および不登校については、自閉症と並んで、黎明期の児童精神医学・児童精神病棟の取り組みの大きな関心事でもあったため、あすなろ学園も関係が深い。例えば、いわゆる怠学や学校恐怖症、そして登校拒否でもない、日本の「不登校」概念の提唱者は、「子ども臨床」概念の提唱者でもある、第3代あすなろ学園園長・清水将之（児童精神科医、関西国際大学名誉教授）である。その清水によると、1960年代の「児童精神医学の始まりと、学校恐怖症と自閉症の「発見」が同時期だったのはなぜでしょう」という問いに対して、「たまたま、そうだったのでしょ」と証言している（不登校50周年証言プロジェクト [2017: 14]、下線部筆者）。つまり、a. たまたま当時の学者たちのものの見方（統合失調症をみる枠組みでの治療や関わりが時代の趨勢であったこと）と、b. その時代に注目された児童たち（とその問題）と、c. 児童精神医学会黎明期、がたまたま重なっただけである、というふうに、である（不登校50周年証言プロジェクト [2017: 12-15]）。

★07 朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の各紙の検索システムによる検索結果（数）とその内容については、別の機会とする。

■文献

- あすなろ学園編 2016 『あすなろの30年』, 三重県立小児心療センターあすなろ学園
- 井上 正吾 1987 「日本精神医学風土記—第2部 第9回 三重県」, 『臨床精神医学』16(10): 1461-1470
- 近代日本精神医療史研究会 2022 「私説・日本精神医療風土記(その27) 三重県(国立療養所榑原病院、三重県立高茶屋病院など)」, (2022年2月25日取得, <http://kenkyukaiblog.jugem.jp/?eid=615>)
- 国立国会図書館 2022a 「朝日新聞記事データベース 朝日新聞クロスサーチの使い方」, 『リサーチ・ナビ』(2022年6月14日取得, https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-1086.php)
- 2022b 「毎日新聞記事データベース 毎索の使い方」, 『リサーチ・ナビ』(2022年6月14日取得, https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-1087.php)
- 2022c 「読売新聞記事データベース ヨミダス歴史館の使い方」, 『リサーチ・ナビ』(2022年6月14日取得, https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/post-1088.php)
- 三重県自閉症協会 2020 「おしらせ」, 『三重県自閉症協会ホームページ』(2020年9月20日取得, <http://www.ztv.ne.jp/tbatuhk3/miejhei/osirase.html>) (*現在、非掲載)
- 高橋悟 2020a 「メモ/あすなろの成り立ちに関して」(2020年8月21日(私信))

———— 2020b 「メモ／あすなろ 022」(2020年9月15日(私信))

植木 是 2022 「1960年代、自閉症施設の出現とその背景——三重県における児童精神医療
とその前史から」, 『遡航』3:71-86

全国不登校新聞社編 2017 「#16 清水将之さん」, 『不登校50年証言プロジェクト』16:1-28

In 1964, how was the establishment of the first Japanese autistic children facilities Mie Asunaro Gakuen reported? :

From the preservation document of "the meeting of a parent and the staff"

UEKI Nao

Abstract:

The establishment of the first Japanese autistic children facilities Mie Asunaro Gakuen is January 15, 1964. How was it reported with newspaper in those days? It is not known between the people concerned now either. Therefore I utilize the preservation document of "the meeting of a parent and the staff" discovered newly in this paper. And I introduced three articles of 1964 of collecting to it, and a general view arranged it whether therefore how facilities and autism were talked about. In addition, I arranged "a list of Asunaro" as the thing which supplemented the article that it was hard to access by the search of the newspaper publisher and I focused in the 1960s and analyzed it. As a result, plural stories of the "meeting of the parent of the autistic children" from 1967 through 1968 whole country organization were delivered, but it became clear that there was an article about the time of the establishment of the hiba arborvitae school that is the article that it was hard to access by the search of the newspaper publisher in specialty facilities, 1964 established some days ago by it.

In this way, it is thought about the word and a concept to be called "autism" having spread through Japan. As follows. a. There is the establishment of facilities specialized in 1964, b. The activity of parents spreads based in there, c. The meeting of the parent is formed in hometown, each place, and the activity of the meeting spreads, d. T The holding of the meeting of the meeting whole country organization of the parent was performed a newspaper report of for 1967 through 1968, e. The word and a concept to be called "autism" through these from the around the end of 1960s spread through Japan.

Keyword:

Autistic children facilities , Asunaro Gakuen (Mie Prefectural Takachaya hospital) , Meeting of the parent of the autistic children , Newspaper report , the preservation document of "the meeting of a parent and the staff"